

江戸医学館の考試辨書『癩癩狂辨』について（第一報）

——当時の精神病学説をみる——

岡田 靖雄

1

報告する資料「癩癩狂辨」は、わたしたちの精神科医療史研究会が一九六八年の明治古典会で入手し所蔵しているもので、江戸医学館における精神病学に関する試験答案集である。出所は不明。

ほとんどのものが「医学館」とはいつている二〇行野紙に、白文の漢文でかかっている。とじこまれているのは二二名分で、第一から第廿二まで番号が付されている。筆者の署名はないが、一四名の名が同一人の筆でかきいれられている。その一四名の名は、塩田孝昭、吉田松菴、田村長安、小森西清、古田休菴、坂本養禎、桂川甫悦、岡田昌春、藤本立運、井上齡菴、赤松久安、谷邊玄珠、吉田周禎、多紀安琢とよめる。このほかに末松長□（虫食い）の名がかかれて・けされているので、未記名分のなかに末松もはいつているのだろう。小森、坂本、岡田、多紀といった名からみて、この医学館が江戸医学館であることはたしかである。

その内容は、それぞれが癩、癩、狂の概念を『黄帝内経』以下の古典を引用して論じ、またそれらの治療法をかいているもので、野紙一枚から四枚、おおくは二枚にわたる。すこし虫がはいつているが、判読しかねる字はすくない。この二名分のまえに「癩癩狂辨批語」がつけられている。この「批語」は二二篇のそれぞれについて、「第一 弁論約当 狂

者枉也不知何所本此等字義不須曲費解釈」、「第七 亦佳」、「第十五 穩当但治法稍略」など、内容につき概評し、問題点を指摘している。この筆は、一四名を記名した筆と同一とおもわれる。このほかに「癩癩狂辨校字」がはさみこまれていて、二二篇中の一五篇についてその字・文章の誤りをただしている。

医学館の試験は考試とよばれていたが、この二二名はある一回の考試をうけた人とかがえてよからう。その考試がつ挙行されたものか、それはしるされていない。

名をしるされている一四名のうちで、生没年などもふくめてその伝記をある程度しりえたのは、桂川甫悦と多紀安琢との二名である。

桂川甫悦は、桂川家六代甫賢國寧の三男として、一八三五年（天保六年）にうまれた。本名ははじめ國謙、一八五六年（安政三年）に講武所砲術教授方仕役を命ぜられ、一八六二年（文久二年）には軍制取調御用を命ぜられ三兵の洋式を採用した。同一八六二年に藤澤九大夫次懐の死去により急養子となり、藤澤志摩守次謙と名のるようになった。一八六八年（慶応四年）には陸軍副總裁（若年寄格）となり、總裁勝安房とともに幕府の最後の支柱となった。一八八一年（明治十四年）に死去。つまり、蘭方医とはいえ奥医師の家にうまれて守旧派というべき医学館にまなんだが、軍政の道にはいって洋式兵制を採択した、数奇な道をあゆんだ人である。しかも、祖父桂川甫筑國寶は、多紀元孝の一男道訓元張の子（つまり多紀元簡の従兄弟）で、桂川家をついだ。

多紀安琢の父多紀元堅（苗庭）は多紀元簡（桂山）の次男で、元矢の倉多紀家（あるいは矢の倉多紀家）をはじめた人。安琢、本名は元琰、字は希温、雲従と号した。幼名は鈴之助、長じて安琢と称した。一八二四年（文政七年）に生まれ、一八五七年（安政四年）に父死去により家督を相続して奥医師となり、のち法印に叙されて養春院と名のつた。医学館督事をつとめ、將軍家茂の治療にあたりつた。一八七六年（明治九年）に死去。

岡田昌春（号滄海）は、はじめ丹羽孝策といつたが、のち岡田氏をついだ。一八四三年（天保十四年）に医学館に寄宿舎が

創立されたときに入学し（一五歳ぐらいで）、寄宿舎頭取などもし、のちには医学館教諭になっている。⁽¹⁾ 医学館で『医心方』を復刻したときの写手には小森西清、岡田昌春、坂本養禎の名が、校正にあたった者には小森西清の名があげられている。また、医学館の調査役をつとめた者のなかに藤本立連の名がみえる。⁽²⁾ 幕医鹽田順庵の子で外交官となった鹽田三郎（二八四三—一八八九）の伝には、「兄宗叔病死す三郎代りて嗣と為る」とあるが、この病死した兄が塩田孝昭でなからうか。

さて、桂川甫悦が一八三五年生まれ、多紀安琢が一八二四年生まれで、随分と年がちがう。前述のように桂川甫悦は一八五六年には講武所にでているのだから、この「癪癪狂辨」としてのこされている考試はそれより前のものであることはたしかである。一八五〇年（嘉永三年）かそのすこしあとのものであるらう。

2

「癪癪狂辨」の内容をみるにさきだって、医学館における考試がどういうものであったか、みておく必要がある。森潤三郎が『多紀氏の事蹟』（日本医史学会、一九三三年）の第五章「医学館」の第二節「考試」を、「医学館に於ける春秋の考試に就いては、まだその実況に関する根本資料を得ないが」とかきだしているように、医学館における考試について具体的なことはほとんどわかっていない。

周知のように、医学館ははじめ、多紀元孝（玉池）が一七六五年（明和二年）に私立の躋壽館として創立したもので、その子多紀元徳（藍溪）の代に至り、一七九一年（寛政三年）より公儀の医学館と改正された。そのときに、若年寄堀田撰津守正敦が目付にわたし、惣医師にふれさせた書付け三通のうちに考試のことも規定されていた。医学館では来春から年に二回春秋の考試をするが、「典薬頭并奥向之面々法印法眼之御医師等」および「四十歳にも及候分」はのぞき、年齢二〇歳ぐらいにもなった者はのこらず考試をうけなくてはならない、また医学館へつねづね出席して修行している者はうけな

くてよい、とある。考試は翌春よりおこなわれたようである。

森はさらに『平日閑話』巻二五が一九九四年(寛政六年)秋の考試につきのべていることを引用している。寛政六年九月には「療治不行届并医学館えも間遠に被致出席候」御番医ならびに小普請御医師とも三一名に考試がおおせつけられ、五名ずつ医案五か条、虚実医学、本草、外科について口答試問がされ、一六名は相応にできたが、御番外科村山元格は当日一向にこたえられず、帰宅後すぐに吐血して死亡した。またおなじく十一月三日には御医者一同に脚氣痛風之辨、虚腫実之辨、腹痛寒痛熱痛之辨、乾霍乱湿霍乱之辨、脈結促代瀆之辨の五か条につき辨書をおおせつけられた。

藤浪剛一「幕府江戸医学館の一補遺に就いて(添田家記録から)」(日本医史学雑誌、第一二八八号、一九四一年)は、幕府寄合医師であった添田家で、幕府よりの公書を書写して手控えとした御廻草留によつてのべている。そこには、文久二年(一八六二年)一月一二日に月番取締(村上良三)の名で回覧された医学小試式・医学大試式についての通知達があげられている。小試には、『傷寒論』、『金匱要略』、『素問』、『靈枢』などについての講釈と、各科専門についてかく問目などがあつた。あらたに創定された五年に一回の医学習業大試は、一八六四年(元治元年)に予定されていたがおこなわれず、翌年に大試挙行の達がだされた。

これらにしたがえば、この「癩癩狂辨」は筆記されているものであるので辨書ということになるのか、また問目ということになるのか、あるいは大試式の六場としてあげられている病論ということになるのか。

二二篇のうちでただ一人四枚とびきりながくかいている多紀安琢は、二〇にあまる文献をひいており、また、古典からのかなり長文の引用をしている人もいる。それをみてはじめ、これは参考書をもちこんで、あるいは「癩癩狂辨」という主題をあたえられて宿題のような形で参考書をみながら、かいたものか、とかんがえた。ところがよくみると、『素問』の「奇病論」からの引用を「通評虚実論曰」として朱をいれられているところがあり、また張介賓のことか「趙氏」とかいて「張」と訂正されているところがある。これらによってみると、この「癩癩狂辨」は試験場で参考書なしでかかれた

ものとわかる。

自分の経験にふれているのは、第三番田村長安が「余嘗テ之ヲ病者ニ徴スルニ〔下略〕」と、また第七番無名氏が「我狂ヲ病ム者ヲ視ルニ〔下略〕」として書いているだけである。またあとでみるように、癩と癩とは別病であるとしている人は、「批語」において「癩癩ヲ分カチテ一ト為スハ殊ニソノ当ヲ欠ク」などと批判されている。このことは、医学館では癩と癩とは本来同病であると教えるような教育はされなかった、もっぱら『黄帝内经』以下の古典をよむことがその教育であったことをうかがわせる。ここには考証学派としての多紀家の面目があらわれている。

さきへのべたように、多紀安琢、小森、岡田、坂本といった人たちは、のちに医学館の教育や『医心方』復刻に重要な役割りを果たした。これからみると、この「癩癩狂辨」としてのこざれている考試は、森が寛政六年九月のこととしてかいているような、怠け者へのいわば懲罰的な考試ではなかった。森が紹介している一七九一年の考試についての規定、ことに、医学館へつねづね出席して修行している者はうけなくてよい、とあるところにもこの顔触れは合致しないようである。考試についての規定が改正されたのか、それとも、医学館に関するほかの規定もそうであったように、考試についての規定もその文面どおりには実行されなかったのだろうか。ともかくも、この考試をうけたという点でこの二二名がどういう人たちであったのか、はつきりつかめない。

3

つぎにこの内容から、当時の漢方における精神病学説、癩、癩、狂の概念をみよう。といっても全体が白文の漢文で(例外的に、第一六番無名氏分に朱で読点が、第二二番無名氏分に句点がはいっている)、また漢方の医説にくらい私には全文をよみくだすのは至難のことで、その全容をつかみとってはいない。なんとかよみくだすことができた二篇を(あえて誤りをおそれずに)あげておこう。

第十七「朱筆」 癩癩狂辨

謹ミテ按ズルニ、内経ニ黄帝問フテ曰ク、人生マレテ癩疾ヲ病ム者アリ、病ヒ名ヅケテ何ト曰ヒ安クノ所ニ之ヲ得ルト。岐伯対ヘテ曰ク、病ヒ名ヅケテ胎病ト為ス、此レ之ヲ母ノ腹中ニ在ル時ニ其ノ母大驚スル所有ルニ得タリ、氣上ボリテ下ラズ、精氣并居スル故ニ子ニ発シテ癩疾ト為サシムルナリト。「医学—朱筆」綱目曰ク、癩癩ハ則チ頭眩ナリ、痰膈間ニ在レバ則チ眩微ニシテ仆レズ、痰膈上ニ溢ルレバ則チ眩甚シク地ニ仆倒シテ人ヲ知ラズ、之ヲ名ヅケテ癩癩ト曰フト。夫レ癩癩ノ病ヒタル之ヲ諸書ノ所説ニ考フルニ名証同ジカラズ、或ヒハ併言シ或ヒハ分言シ、風癩、風癩、癩狂ノ名指ス所一ナラズ。内経ハ癩ヲ言ヒテ癩ヲ言ハズ。徐嗣伯ハ、大人ハ癩ト曰ヒ小兒ハ癩ト曰ヒ其ノ実一病ナリト云フ。之ニ依リテ之ヲ觀ルニ、癩癩固ヨリ是一疾ナリ。人ニ虚実有リ病ヒニ緩急有リテ、発スル所一様ナラズ。故ニ癩ト曰ヒ癩ト曰フハ其ノ発スルノ状ヲ目スルナリ。狂言妄想シテ年ヲ経テ愈エズ。或ヒハ仆レシ時ニ口中ニ声ヲ作シ將ニ省セントスル時ニ涎沫ヲ吐キ、省シテ後又復タ発シ時ニ作シ時ニ止ミテ休息セズ。或ヒハ僵仆シテ直視シ心常ニ染シマズ、言語倫無く酔ヘルガ如ク癡セルガ如シ。或ヒハ卒然暈倒シ牙ヲ咬ミ声ヲ作シ涎沫ヲ吐キ人事ヲ省セズ、随ヒテ後醒タス。此クノ如キ証候多端ニシテ枚挙スベカラザルナリ。狂ノ病ヒ為ル小相類スト雖モ自ラ陰陽ノ別有リ。内経ニ黄帝問フテ曰ク、怒狂ヲ病ム者有リ、此ノ病ヒ安クニ生ズルカト。岐伯対ヘテ曰ク、陽ニ生ズルナリト。帝曰ク、陽何ヲモツテ人ヲシテ狂セシムルカト。岐伯曰ク、陽氣ハ暴ニ折ケテ決シ難キニ因リテ故ニ善ク怒ルナリ、病ヒ名ヅケテ陽厥ト曰フト。帝曰ク之ヲ治スルニハ奈何ト。岐伯曰ク、其ノ食ヲ奪ヘバ即チ已ムト。難経ニ曰ク、狂ノ始メテ発スルヤ少シク臥シテ多ク起キ自ラ高賢ナリトシ自ラ辨智ナリトシ自ラ倨貴シ、妄リニ笑ヒ歌樂ヲ好ミ妄リニ行ヒテ休マザル、是ナリ。蓋シ癩癩狂ハ多ク痰心胃ノ間ニ結スルニ因リテ発スル者有リ。或ヒハ滯食シ氣ヲ塞ギ、或ヒハ風寒シ外ニ閉ジ内ニ氣鬱室シ、或ヒハ房勞シ内ニ虚シ精氣留滯シ、或ヒハ思慮ヲ過用シ心情大鬱シテ発スル者ナリ。故ニ其ノ從來スル所ヲ詳カニシテ後、瀉シテ可ナレバ則チ瀉シ、補シテ可ナレバ則チ補ス。宜シク痰ヲ開キ心神ヲ鎮ムベキナリ。癩癩ヲ療スル者ハ瓜蒂散、妙功十一丸、沈香天麻

湯、千金龍胆湯、茯苓補心湯ノ類ナリ。狂ヲ治スル者ハ、清心温胆湯、柴胡加龍骨牡蠣湯、大柴胡湯加鉄粉、三黃瀉心湯、朱砂安神丸ノ属ナリ。虚実ヲ詳カニシ陰陽ヲ辨ジ、宜シク証ニ随ヒテ之ヲ用フベシ。庶幾クハ大過無カラントヲ。伏シテ教諭ヲ竣フ。

吉田周禎〔別筆〕

第廿〔朱筆〕 癩癩狂之辨

謹ミテ案ズルニ癩癩狂ハ其ノ証多ク相類スルヲモツテ諸書ノ所載略定論無シ。或ヒハ癩狂ト曰ヒ或ヒハ癩癩ト曰ヒ、三証相混ズルヲモツテ正ヲ辨ズルアタハズ。蓋シ癩ハ其ノ名本内經ニ出デテ、癩ヲ言フモノハ胎病ト為ス。母ノ腹中ニ驚ヲ受ケン所ヨリ致スナリ。靈枢ハ癩狂ヲモツテ一門ト為スト雖モ、然レドモ其ノ証候両ツナガラ相分シ、治方又自ラ相具ス。然ラバ則チ癩癩狂ハ辨ゼザルベカラザルナリ。巢氏病源候論ノ風癩ヲ論ズル者ハ其ノ文大抵素問ト符シテ、原其ノ癩病ヲ言フハ皆風邪ノ故ニ因ルト言フナリ。又癩病ヲ論ジテ、癩ハ小兒ノ病ヒナリ、十歳已下ヲ癩ト為シ十歳已上ヲ癩ト為スト云フ。然ラバ則チ大人ニ癩疾無ク、小兒ニ癩疾無キノミ。此ノ論確カナラザルニ似タリ。之ヲ要スルニ、經ニ云フ母ノ腹中ニ在リテ驚ヲ受ケン所ヨリ致スナリ。是真ニ一定不易ノ論ナリ。然シテ其ノ發スル時ニ至リテヤ、必ズ是何ノ氣カモツテ感ズル所有ルナリ。其ノ証卒然トシテ眩倒シテ人事ヲ知ラズ、必ズ涎沫ヲ吐キ口言フ所無ク耳聴ク所無ク、或ヒハ目上視ヲ作シ或ヒハ手足搗撃ス。此レ則チ宿病ニシテ療スベカラザル者ナリ。癩ハ則チ心肝胆三臟ノ病ヒナリ。其ノ源ヲ原ルニ或ヒハ心神虚怯ナルニ因リ、或ヒハ肝氣ノ抑鬱スルニ因リ、或ヒハ胆氣ノ平ラナルザルニ因ル。然リ而シテ、人ノ血氣偏勝シ形体強弱ナルニ依リテ、劇易緩急ノ別有ルノミ。故ニ其ノ証又一ナラズ。或ヒハ心思幽鬱シテ静処ニ居ルヲ好ミ閑亭ニ独坐シテ人ト交ラズ。或ヒハ金石器物ノ類ヲ常食ス。或ヒハ忽チ染シム所有リ忽チ憂フル所有ルニ似ル有リ。而シテ其ノ証敢テモツテ名状スベカラザル者ナリ。其ノ劇証ノ如キハ則チ卒然昏仆シ手足攣急シ眼歪斜スル、是皆久シウシテ敗壞ノ証ト為ス。諸書所載ノ心肝胆ノ病ヒ多ク此ノ証有リ。是則チ癩病ナリ。狂ハ則チ心肝二臟ノ病ヒナリ。其ノ源ヲ

原ルニ、或ヒハ心経畜熱スルニ因リ、或ヒハ肝氣亢盛シ血ヲ藏スル能ハズシテ此ノ証ヲ為ス。故ニ婦人往々是有ルハ、氣血心ニ迷ヒ或ヒハ産後惡露上衝シテ狂ヲ発スル者有ルニ因ルナリ。当ニ其ノ発セントスルヤ、必ズ妄リニ言ヒ妄リニ怒リテ墻ヲ踰エ屋ニ上ボリ刃ヲ持チ棍ヲ執リ罵詈親疎ヲ避ケザルノ類、是ナリ。諸書此ノ三証ヲ分カチ説ク者至リテ少ナシ。張氏曾テ靈樞癲狂篇ニ注シテ、癲病ハ陰ニ発シ狂ハ陽ニ発スト云フ。故ニ二十ノ難ハ、重陽者ハ狂シ重陰者ハ癲スト云フ。然ウシテ陽ハ多ク余リ有ル故ニ狂ノ発スルヤ時無ク、其ノ状ハ疾クシテ暴シ。陰ハ多ク不足スル故ニ癲ノ発スルヤ期有リ、其ノ状靜カニシテ徐ナリ。此レ癲狂ノ辨ナリ。此ノ説頗ル理有ルニ似タリ。孫東宿亦タ三証ヲ分カチテ、癲証只涎沫ヲ吐クヲモツテ癲狂ト別カツベント言フ。孫氏大成論又、癲ハ必ズ涎沫ヲ吐クト云フ。此ノ二論少シク疑フベキ有リ。タダ癲証ニシテ涎沫ヲ吐クト言フハ則チ可ナリ。其ノ癲証ニシテ涎沫ニ吐クコト無シト言フハ、則チ経意ニ負フカ。余未ダ何レガ是ニシテ何レガ非ナルカヲ知ラズ。一タビ書ヲ閱スルゴトニ必ズ一層ノ惑ヒヲ添ヘテ、敢テモツテ辨スル所ヲ知ラザルナリ。

この二篇は比較的よみやすいためにえらんだもので、二二篇の内容を充分に代表するものではなく、読み誤りもあるろうが、「癲癇狂辨」の内容はこれではぼ察することができよう。「癲癇狂辨批語」には「第十七 平穩」「虫食い」方亦佳但シ瓜蒂散ハ亦癲狂ニモ用フベシ」とあるが、「癲癇狂辨校字」は第一七篇はとりあげていない。おなじく第二〇篇について「批語」は「第二十 癲癇ヲ分カチテ二証ト為スハ殊ニ□「不明」混ニ屬ス。言フ所ノ癲ハ今医ノイハユル癲証ニ似ル。彼レ則チ氣痰心風ノ類ナリ。其ノ証甚シケレバ則チ狂ト為ルハ古ヘノイハユル癲ニアラザルナリ。且ツ云フ所ノ劇証ナレバ卒然昏仆云々ハ則チ是癲ノ現証ノミ」といい、「校字」は「第廿 靈樞ハ癲狂ヲモツテ一門ト為ス云々、靈樞ハ癲狂ヲモツテ一篇ト為スト作セ。然ウシテ其ノ証候則チ截然トシテ別有リ、治方モ亦復同ジカラズ。必ズは何ノ氣カモツテ感ズル所有ルナリハ、文意□「不明」通。或ヒハ金石器物ノ類ヲ常食ス。此ノ句穩カナラズ。食ハ嚼碎ト作セバ纒カニ通ズ」という。

全体を通覧すれば、癩は『黄帝内経』に記載されているためだろう。それについての記述はほぼ合致していて、おおくは『黄帝内経素問』の「奇病論篇」や『黄帝内経靈樞』の「癩狂篇」を引用している。その例は第一七番の吉田周禎のものにみられるとおりである。つまり、癩は、生来性の痙攣性疾患であり、今日いうところの癩癩およびその類似状態である。

癩と癩との関係については、二二篇中の一七篇は癩・癩同病説をとる。たとえば、第一八番の多紀安琢は「癩癩狂トハ何ゾヤ。癩ト狂トノ謂ヒナリ、三病ニ非ザルナリ」とかきだしている。そしておおくの人が「巢元方曰ク、癩ハ小兒ノ病ヒナリ、十歳以上ヲ癩ト為シ十歳以下ヲ癩トナス」となどと、癩と癩との関係をかいている。つまり、癩も癩もともに今日の癩癩に相当する疾患であって、両者はその患者の年齢によりわけられているのである。

多紀は「狂ハ衷心ノ謂ヒナリ」という。狂についておおくひかれているのは、「癩狂篇」の、「狂ノ始メテ生ズルヤ、先ヅ自ラ悲シムナリ。善忘シ苦怒シ善ク怒ルハ、之ヲ憂・饑ニ得タリ。〔中略〕狂ノ始メテ発スルヤ、少シク臥シテ飢エズ、自ラ高賢ナリトシ自ラ智ヲ辨ズトシ自ラ尊貴ナリトシ、善ク罵詈シテ日夜休マズ。〔中略〕狂言シ驚キ善ク笑ヒ好ミテ歌楽シ、妄行シテ休マズ。〔中略〕狂シテ目妄リニ見、耳妄リニ聞キ、善ク呼^ヤブハ、少氣ノ生ズル所ナリ。〔中略〕狂者多ク食ベ善ク鬼神ヲ見善ク笑ヒテ外発セザルハ、之ヲ大イニ喜ブ所有ルニ得タリ」や、これから派生した記載であり、ここからも狂の概念は今日の狂氣、すなわち精神病的状态に相当することがわかる。

二二篇中の四篇は、癩と癩とは別病であるとしている。この四名の説や引用書目はすこしずつちがっているが、その一例はすでにその読み下し文をあげた第二〇番のものである。そこに書かれていることを、現在のヨーロッパ系医学の用語でいえば、——癩は生来性の、大発作を主症状とする不治の宿痼である、癩は心肝胆三臓の病いで、閉居・憂鬱がその主症状で、劇症であれば大発作となる、狂は心肝二臓の病いで精神運動興奮が主症状である、——ということになる。つまり、「批語」もいうとおり、癩の劇症とは癩にはかならないこととされている。このほかの、癩と癩とを別病とする人

に対して、「批語」は「癩癩ヲ分カチテ二ト為ス、ソノ說晰^アラカナラズ」などと批判している。

のこる一篇第二一番は、「素問ノ通評虛実論曰ク」、「二十ノ難曰ク」、「千金方ノ云フ」、「王肯堂ノ云フ」などなど引用が並列されていて、それらからは、第二一番無名氏が癩・癩・癩・狂をどうかんがえたか、わたしにはよみとれない。

そこで、「癩癩狂辨批語」も含めた全体の考え方としては、癩と癩とは同病であるが年齢をもつてわけられる、癩癩と狂とは別病である、というのが、江戸医学館における主流的な考え方であった。

内容にはさらに、癩・癩・狂と五臓との関係、陰陽との関係、五癩、癩・癩・癩・狂の治療法などもかかれていた。治療法についてはのちに検討し、これは第二報においてのべたい。陰陽との関係では、第二〇の無名氏がのべているような、重陽者は狂し重陰者は癩すといったことが指摘されている。

もう一つの重要な内容は引用文献で、それをくわしくしらべれば、漢方の古典における癩・癩・狂関連記載への手引きとなるだろう。これも第二報の課題としたいが、さしあたって、主要引用文献の名前だけあげておこう。——『黄帝内経素問』（五臓生成篇、脈要精微論篇、玉機真臟論篇、宣明五氣篇、通評虛実論篇、病能論篇、奇病論篇、大奇論篇、脈解篇、長刺節論篇、陰陽類論篇、方盛衰論篇）、『黄帝内経靈樞』（癩狂篇、寒熱病篇）、『難経』（二十難、五十九難）、『千金方』、『諸病源候論』、『王篇』、『史伝王符潜夫論』、『隋書許智藏伝』、楊玄操、張介賓。

4

癩・癩・狂の概念は随分と変遷したようである。たとえば香川修徳の『一本堂行余医言』（一八〇九）は、「癩ハ驚、癩、狂ノ総名ニシテ兼ナル所尤モ衆広ナリ」としている。癩は狂なりとする古医書もある。

ここで第一番の塩田孝昭が「癩・癩・狂ノ三疾内経及び八十一難已ニ其ノ説ヲ具ス。但シ古経ノ言簡説ニシテ詳シカラズ。是ヲモツテ後世諸家各々私見ヲ逞シクシテ紛々擾々諸説一ナラズ、人ヲシテ惘然適ク所ヲ知ラザラシム」とかきだし

ているのも、もっともなことである。ここで癩・癩・狂概念の変遷をたどるのは、現在のわたしのよくするところではない。癩・癩・狂の概念が混乱したのは本場の中国においても同様だったようで、『難経』の楊注にも、「故ニ経ニ言ハク重陽ノ者ハ狂ストハ此レヲ之謂フナリ。今ノ人モツテ癩疾ト為スハ謬ナリ」、「癩ハ癩ナリ。「中略」今ノ人モツテ癩病ト為スハ誤ナリ」とある。周知のように『黄帝内経』は癩および狂についてはくわしいが、癩は「大奇論篇」に「癩瘵」、「寒熱篇」に「癩眩」としてでるだけである。このあたりを多紀安琢は「則チ内経ノイハユル癩ハ本癩ノ証候ニシテ」とかいている。富士川游は『日本医学史』（一九〇四年、裳華房・東京）の「疾病史」の章に、「然ルニ、後世宗以後ニ及ビテ癩ト狂ト癩トヲ別チテ三症トナシ〔中略〕癩症ヲ以テ癩癩トシ、癩ヲ以テ静ナル狂症トシ、狂ヲ以テ躁シキ狂症トナシタリ」とかいている。

前述したような、癩・癩同病で狂とは別病であるとする、この「癩癩狂辨」全体としての考え方は、途中の混乱を整理して『黄帝内経』における概念に復帰したものと見える。そこに独創的なものはみられない。

ヨハンネス・デ・ゴルテル原著を宇田川玄随が翻訳した『西説内科撰要』（一七九二—一八一〇）はわが国最初の西洋内科書で、そこにはメランコリヤ、ヒポコンデリヤ、アンキシタス、ソボル、アゲリプニヤ、デリリウムなどの医説がべられており、これがヨーロッパ精神病学説のわが国への最初の紹介であろう。わが国の漢方医学では中神琴溪の『生々堂医談』（一七九六年）より精神疾患への関心の高まりがみられ、一八〇五年（文化二年）には土田獻の『癩癩狂経験篇』もでている。

江戸医学館における考試の主題として癩癩狂がとりあげられたことも、精神病学的問題が当時すでに無視できなくなっていたことをしめすものだろう。

医学史にとりくもうとするきっかけの一つをわたしにあたえてくださった

小川鼎三先生のご霊前に

この小論をささげます。

本論文の要旨は一九八三年二月一七日の日本医史学会・蘭学資料研究会合同例会および一九八四年四月二二日第八回日本医史学会学術大会（酒井恒会長）で発表した。この資料をここまでよむについては、山田光胤・宗田一・大塚恭男・長谷川弥人・酒井シヅの諸先生にご教示いただき、また例会の席でもおおくの方々にご助言いただいたことを、記してお礼をもうしあげる。

文献

- (1) 岡田昌春 躋壽館遺事。中外医事新報、第四二二—四二六号、一八九七年。
- (2) 森潤三郎 『多紀氏の事蹟』、日本医史学会・東京、一九三三年。
- (3) 大日本人名辞書刊行会編 大日本人名辞書(二)(講談社学術文庫)。講談社・東京、一九八〇年。

(東京都杉並区)

The Examination in Psychiatry in the Edo Medical School

(the 1st report)

by

Yasuo OKADA

The Taki family transmitted by heredity the position of the chief medical officer of the Tokugawa Shogunate, and represented the school of Chinese medicine, which vigorously investigated ancient literature. The Edo Medical School was founded by the Taki family in 1765, and was recognized as a public medical school in 1791. In the Edo Medical School examinations for

medicl officers and their relatives were held twice a year. But concrete facts of the examination are not known.

The Society for the Research of Psychiatric History possesses manuscripts, entitled "A Treatise on Insanity (or, a treatise on *tien* 癲, *hsien* 癩 and *k'uang* 狂)". The manuscript was written on ruled paper of the Medical School by 22 persons, including Katsuragawa Hoetsu (1835~1876) and Taki Antaku (1824~1876). The examination, now left in the form of these manuscripts, must have been held in 1850 or so.

Examinees discussed concepts of *tien*, *hsien* and *k'uang*, referring to the "*Huang-ti nei-ching* 黃帝內經, the Inner Classic of the Yellow Emperor" and other classics of Chinese medicine. Almost all the examinees advocate that *tien* and *hsien* are the same convulsive disease, that *hsien* is *tien* in children, and that *k'uang* is a mental disease. This view was the conclusion of views on insanity by ancient Chinese medicine, and added nothing new.

Towards the end of the 18th century traditional medicine developed interests into psychiatric problems. These manuscripts represent the then growing interests. (In this author's abstract, the family name of the Japanese is put before his personal name, according to the original Japanese style.)